

栗野・徒然日記

式帖の式・夏

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2022.6.2 麦秋至(むぎのときいたる)



田植えの前後、小麦は収穫期を迎え、金色に輝きを見せています。

小麦の自給率は 12%ですが、需給バランスは微妙で、これまでは必ずしも供給部策とは言えないらしい。ロシアのウクライナ侵攻と海上封鎖によって、主要生産地であるウクライナの小麦の輸出ができないことによる飢餓に直面する国が生じている。円安による国内のインフレも進みつつある。エネルギー資源の確保とともに、食料自給率の向上の必要性は、歴史が教えているにもかかわらず、低下の一途をたどっている。

改めて東欧の悲劇は、我が国に数多くの教訓を与えている。

2022.6.4 美しい虫、不気味な虫



数年前、我が家の庭のムクゲの若木を枯らしてしまつた小型のカミキリムシ。その後、種から2mほどに育つたムクゲに、再び何匹もが集まつてきました。エメラルドよりやや薄い水色に輝いています。それはそれは、この上もなく美しい。色合いはルリボシカミキリに似ていますが…フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると、「日本を代表する甲虫としてルリボシカミキリを挙げる昆虫愛好家も多い。(中略)生木を食害することはない。(中略)近年の森林開発などによって生息域が狭められ、その数は減少傾向にあると考えられる」とあります。確かに見かけることはまずないのですが、以前のムクゲの生木には無数の個体が集まり、その美しい虫に心揺さぶられ放任していたら、数年後に枯れてしまいました。いわゆるカミキリムシの幼虫であるテッポウムシのように、幹の根元を一回りかじつて枯らしてしまうようなことはないにしても、幹に巣食つたことにより枯れてしまうのかも知れません。ただルリボシカミキリではなく、色は異なりますが、模様や食草からはラミーカミキリなのかも知れません。

大型のカミキリムシも、カブトムシのようにそれなりにわくわくする甲虫ですが、40年近く前、他に見かけたこともない立派なノムラモミジをやられた大失敗があります。さらに、その教訓も生かせず、太いやまもみじもやられました。いずれも根元に草花が茂っていたこともあり、カミキリムシの絶好の隠れ家になったのでしょう。

木か虫のどちらを守るかと問われたら、大切な庭木と答えざるを得ないのですが、ちょっと悩んでしまう。それにしても、このあたりの林にモミジがあまり生えていないのは、カミキリムシが多いせいかもしれません。

美しい虫がいる反面、ナナホシテントウムシの幼虫は知らない人にとってはちょっと不気味で、殺処分していた人がいました。カミキリムシが再登場する何日か前、アブラムシが大量発生していました。数匹のテントウムシの幼虫が、それを数日で食べ尽くしてくれました。殺虫剤にも負けぬすごいパワーです。



▲同じムクゲの木に付いたのアブラムシを、テントウムシの幼虫がしっかり食べてくれました。

2022.6.5 柳ヶ瀬今昔



シャッター街と化したアーケード下で、毎月第3日曜日に開催されるサンデービルディングマーケット。始まって、かれこれ8年余りとなります。個性的な露店が並び、普段シャッターが下りている店も趣向を凝らした臨時の店舗風景が見られ、一帯は結構にぎわっています。昨年からは第1土曜日にも日ノ出町のロイヤル劇場ビル周辺を中心に開催されるようになりました(写真。シャッターが下りたビルの前に露店が連なる日の出町通り)。また、第2土曜日には、GIFU ANTIQUE ARCADEの名で、古道具店や輸入雑貨を取り扱うアンティークショップが出店するようやくマーケットも開かれます。昔の栄華に胡坐をかき続けた時代から、まちづくりに欠かせない感性とエネルギーを感じる時代によりやく移った感があります。薄暗い店の奥から、店主が通りを伺っていた時代から少しずつ変化が見られます。

柳ヶ瀬に立ち寄ったついでに、名古屋ではなかなか手に入らないと言われる、ツバメヤ本店の草餅とわらび餅を土産に買いました(いつの間にか、ロイヤル劇場ビルから神田町の本通りに移転し間口も広く営業していました。数軒ほど南のベンテンドーの

栗子餅は相変わらず絶品。初めて食べた、甘いもの好きの彼女は、「メチャクチャおいしいですね」と驚きを隠せません。とんねるずの番組で放送されていた「食わず嫌い王」に伊藤英明が持参し、芸能人御用達絶品お土産の年間ベスト1に選ばれた逸品です。放送後、1年余りは大変だった、と家族だけで製造していたお店の方はおっしゃっていました。時の経つのは早いもので、もう数十年前になりますね。今はなくなった名店を思い出しました。支店は出さないことでも有名だった菊屋ヴェーカーリー(西柳ヶ瀬の入り口付近)のショートケーキも大繁盛していました。ケーキの袋を提げたお客さんが、界隈に見られたものです。丸物百貨店(現中日ビル)の南筋で60年ほど前に店を構えていた「こがね軒」のハイカラな菓子パンにも人だかりができていましたし、ラードで揚げる辰巳屋(神田町交差点東北)のコロッケも、まさに絶品でした。高島屋南地区の再開発ビル「柳ヶ瀬グラスル35」の整備が進んでいます。平成元年度に同地区のクリーニング屋の2階で開かれた再開発研究会の集まりには、10人も参加していなかったと記憶していますが、あれから30年余り、来年2月に竣工の予定です。駅からかなり離れた全国でも珍しい、かつ有数と言われた商店街の柳ヶ瀬。居住者が増えれば、映画館や酒場のような以前の形態とは異なった形で、日常的な賑わいを生み出すに違いありません。

▶昔の柳ヶ瀬本通りの絵葉書。歴史博物館によると「昭和11年の躍進日本大博覧会の際のもの、鴉や扇の飾り物が、博覧会気分を演出している」とか。豚の味噌ステーキで有名な洋食屋ライオンの看板が見える。昭和30年代は、肩が触れ合うほどの混雑ぶりでした。昭和50年代以降でも、酒場の賑わいはすさまじく、午前2時になっても、タクシーを拾うのは困難でした。



2022.6.9 花ごよみ・初夏の白い花



◀オオカナダモの可憐な花。

鳥羽川に、オオカナダモが白い花を咲かせています。三輪地区から流れる石田川の合流地点から群生する風景が見られ、黒木橋下流は一面に見られます。その名の通り外来種で、在来種のクロモが駆逐されるらしい。丈夫なため、アナカリスの名で、水槽用に売られていますが、野生のものには雑菌や虫がついているため、水槽に入れる前には下処理が必要。ホームセンターで購入した水草でも、そのまま水槽に入れると、いつの間にか小さな貝が沢山発生することも少なくありません。結構いい値段なのだから、下処理はしてほしいですね。

川だけでなく栗野台の山際にも、小さくて目立たないけれど、白い花々が見られますよ。



▲山際ではサカキ、ヤマノイモの白花が満開に。アカメガシワは、紅色をした新芽と穂状の白い花を付けています。

2022.6.14 花ごよみ・梅雨に咲く



▲アジサイの花弁に見えるガク(装飾花)の合間に咲く花(真花)。



▲ナンテンは梅雨時期に咲くため、花粉が流されて実付が悪くなるとも言われますが、空梅雨の今年はどうでしょう。



▶梅雨空のもとハンゲショウとトラノオの競演。

穂状に咲くトラノオの花弁を近くで見ると、雫をまとっています。

昔は、梅雨と言えば田植えを連想させましたが、今は梅雨入りする頃は田植えはとっくに終わっていることが多いですね。珍しくも、一区画残っていた田に6月11日に植え付けが終わりました。用水路の整備により、さして遠くない昔に起こっていた水争いがなくなり、雨を待たなくても田植えが可能となったことも一因しているのかもしれませんが。

岐阜も今日、梅雨入りしました。

絹のような雨が降り続いています。庭の草木も雨粒をまとい花開いています。今年はラニーニャの影響で梅雨明けが早くなるとの予報も。どちらにしても災害なんかが起こりませんように。



2022.6.15 公民館のスマホ教室



公民館講座として初心者向けスマホ教室が、午前中に開催されました。事前予約で、ちょうど定員の20人が参加。参加者にはアイホンの機種が1人台貸し出されました。まずは持ち方から始まり、次に現在地の地図を画面に表示した後、ニューヨークの女神の像に移動し、3Dで像の後ろ側まで見学しました。その後、カメラ撮影、メールの送信の順で学びました。知りたいことはたくさんありますが、分かりやすい丁寧な説明と清々しい講師の皆さん、そして和気あいあいの参加者で、楽しく受講することができました。講座を企画していただいた公民館のスタッフさん、ありがとうございました。

以前、インターネットが普及し始めた当時、各地域の公民館を会場に、市が主催して計画的に講座が開催されました。今では、インターネットはすっかり社会に定着しましたが、ガラケー世代にとってスマホは仕切りが高いもの。一方で、スマホを使ったクーポンサービスなどが、民間企業はもとより、市でも行うようになりました。ペイペイで買い物をした人を対象に1万円限度のポイントが還元されるサービスが代表的なものでしょう。とは言え、行政主導のスマホ講座は、インターネットの普及当時とは比べようもなく低調です。家族から教わることができるかなかなかからかもしれません。サービスを楽しめない高齢者が多いのでは？情報格差の解消も自己責任ということでしょうが、核家族化が進む高齢者世帯にとっては、これがなかなか難しい。

興味深いテレビ番組を発見しました。NHKのEテレ「趣味どきっ！～使えてますか？スマホ～」(水曜日午後9時30分からで、今夜でシリーズ3回目)です。前回の放送では、撮影した花の名前などを検索する方法が紹介されました(使ってみたらとっても便利でした)。

年間何回か開催される公民館講座は、生涯学習を応援するとともに、地域の交流の場にもなっています。コロナ禍で休止されていたサークル活動も順次再開されてきました。また、地域のまちづくりの拠点としても、今後ますます重要な役割を果たしていくでしょう。利用したことがない方も、まずは公民館講座を覗いてみてはいかがでしょうか。

2022.6.27 鳥羽川(まとめ)



治水と親水を両立させたい鳥羽川



▶平成6年に多自然型工法により整備・完成した戸石川の親水広場(平成9年の広報ぎふ)。

6月19日のまちづくりサロンでは、鳥羽川の今昔について話題になりました。

「昔は、鮎が遡上した」、「子どもの頃は赤フンドシで泳いでいた」「シジミもいたらしい」。51年の水害を受けて、土盛りの堤防(毎年、田植え前には側溝清掃と草刈を、自治会・班総出で行っていました)も、三面張り工法で整備されました。お隣の常磐地区の戸石川も天井川で、大雨が降ると、堤防すれすれまで水が増えたのを覚えています。ある時は、北警察署の辺り一面が水に浸かった風景を金華山頂上から眺めた記憶があります。今では、治水工事のおかげで随分と改善されました。ただ、5月23日の日記にも書きましたが、鳥羽川の魚の種類が減った気がします。また、アメリカザリガニやヌマエビなど、以前は仕掛けに入り込まなかった種類も見られます。

上流の三輪地区や山県市にも下水道が整備され、水質が改善される一方、水量が減少したのではないのでしょうか。山県市の鳥羽川上流から泡が浮く日が見られたり、新川の流れからオオカナダモが繁茂し始め、黒木橋辺りから川一面にオオカナダモが花を付ける様子が見られます(6月9日の日記)。一見豊かな環境が形成されているようですが…。鮎は、川底の石に付いた藻を食べるわけですから、水草が生えるような泥が堆積した川では、遡上が見られなくなったのも当然です。現在、栗野の田畑は、少子化だということに次々と宅地化されています。市内に入った途端、河川の環境はますます様変わりしていくに違いありません。今日、自然工法も行われるようになりましたが、改修されて間もない河川の場合は、とても全面的な再改修工事は見込めません。また、失われた自然環境が、ハード面だけで、どこまで取り戻すことができるか…防災と自然環境保全の両立は依然として難しいテーマです。

さて、木曾川の下流には、ワンドがあり、天然記念物のイタセンパラが生息しています。これは明治時代の治水工事で設けられたレセップ水制という川に突き出した堤のおかげで、流れの緩やかなワンドができたためと言います。結果として希少種が生息できる環境が生み出された好例でしょう。全面改修工事は無理としても、都市型河川の鳥羽川の各所に、治水面にも配慮した親水空間を生み出すことができれば、豊かな生態系の創出と住み良い環境づくりにつながるに違いありません。まちづくりビジョンでは、命と住環境を脅かす通過交通の問題とともに、鳥羽川の環境向上を、中長期的なテーマに位置付けています。これら中長期的課題は、サロンをはじめ、総会、安全部会、環境部会などで活発に話し合うとともに、関係機関と協働して対策について協議したい大きなテーマです。

2022.6.27 梅雨明け・・・外来種飛翔



▲止まりにくいのかベルガモットの周りをうろうろ飛び回っては蜜を吸うタイワンタケハナバチ。ムクゲの白い花だと、すばしこいハチでも撮影しやすい。

先程、梅雨明け宣言がありました。わずか13日間という、観測史上最短の梅雨でした。これまでの記録は20日間とのことです。更に1週間も短い。また、6月22日に明けた1963年に次いで早い梅雨明けとのこと。東日本には「電力需給逼迫注意報」が発令され、家庭や企業の節電が呼びかけられています。長く厳しい夏が待ち受けます。ロシアからのエネルギー供給に頼っていた、クリーンエネルギーを指向するドイツでも、石炭火力発電に切り替えざるを得ないようです。もとより、日本でも老朽化で中止していた石炭火力発電の炉の再稼働を進めるとのこと。地球温暖化が更なる暑い夏の訪れを招くことに？

太陽の光が降り注ぐ庭のベルガモット(タイマツバナ)に、見慣れぬハチが3匹、蜜を吸いに訪れています。スマホで撮影し、テレビのスマホ教室で学んだ機能で検索してみると「*Xylocopa californica*」の名前で表示された写真とそっくり。でも、アメリカに生息しているハナバチの仲間らしいので、多分違うのでしょう。更に検索してみると、見つけました。タイワンタケクマバチ(学名は、*Xylocopa (Biluna) tranquebarorum tranquebarorum*)のようです。日本では2006年に豊田市で初めて報告され、愛知、岐阜、三重、長野、福井、石川、京都、滋賀に広がっているらしい。昨年は島根県内でも計匹が確認されたらしい。枯れた竹の中で幼虫を育てるらしく、竹ぼうきなどに混入して中国の種類が侵入したのではないかと推測されています。攻撃性は低いらしいけれど、刺される恐れは否定できないようです。

3cmほどの体長は黒く、翅は陽差しを受けて光沢ある色彩を帯び、ブンブンと羽音を立てる様子は、なんとも暑苦しい。



“ぐるっとバス”の後方に、夏雲が沸き立っていました。

2022.7.2 炎暑の朝



6月23日から今日まで30度超えの日が続きます。30日は38.2度まで上昇し、6月としては記録が始まって以来最高となりました。7月に入り、昨日は38.4度。梅雨明けが図った分、1カ月余計に長い暑い夏となりそうです。

今日も朝から、燃える太陽が昇っています(トップ写真5時12分撮影)。各地で熱中症の被害が出ています。くれぐれもご注意のほど。



▲右サイドに鳥羽川と眉山(5時12分撮影)



▲左サイドに鳥羽川と眉山(5時13分)



▲あいさつ運動ののぼりに透ける朝陽(5時18分)。

▶ツバメの一家が飛び交っていました(6時36分)。



2022.7.3 戻り梅雨

朝から雨が降り始めました。昨日までの暑さから解放され、最高気温は25度。人にも草木にも恵みの雨となりました。日差しで焼けついていたカンボクの葉も、一息ついています。とは言え、しばらく降り続くとの予報です。気候変動を抑えることが直面する人類の共通課題

台風の接近もあり、大雨への警戒が必要なのに、戦争を仕掛けた国の愚かさが、再び世界の時計の針を戻してしまいました。



▲オオボウシバナの一番花も、雨露をまとっています。



2022.7.9 青い実



◀つい最近芽吹いたばかりのような気がするアカメガシワが、もう実を付け始めていました。



▲ナンキンハゼの青い実。

▼下の写真は、5月半ばに咲いていた花はとても地味かも (5月15日撮影)



▲赤く熟すまではまだ時間がかかるサルトリイバラ。



▲リョウブが満開。地味な実が秋に垂れ下がります。



栗野台の団地の山際で、山栗が青い実を付けている。ハゼやサルトリイバラも秋に向けて青い実を付けている。

草木は、青い実も、暑さ寒さを乗り越えて季節が来ればいつか完熟する。

卑劣で哀しい事件がひんぱんに続く人間社会。年齢を重ねても熟さない、一筋縄ではいかない人間界だけれど、摂理ある自然界とはあまりに違い過ぎる。

自然界に見習うべきことは多いのだが。

2022.7.14 ソ連がGDP世界第2位だった頃①



ロシアによる侵略戦争が止まらない。国連の常任理事国によって戦争が引き起こされるという現実を、世界に突き付けた。ソ連崩壊後も、世界は騙され続けられたのだ。21世紀にまさか、と、日本人は日本人の感覚で錯覚していたかもしれない。

1977年、私の父は、駆け足でヨーロッパ(イギリス、フランス、スウェーデン、スイス、イタリア)、ソ連、アメリカを訪れている。その当時のソ連に関して、わずかな時間ではあるけれど、市中で感じたことを父はメモしている。

この年は、ソビエト社会主義共和国連邦憲法が制定されている。一党独裁国家が「全人民の国家」になったとされ、ソビエト連邦を構成する各共和国に対して、ソビエト連邦から脱退する権利を定め、後のソ連崩壊に際して役割を果たしたとも言われる。

当時、ソ連のGDPは、アメリカについて世界第2位であった(統計の信ぴょう性が疑われる国もあるが)。

父は、ソ連の軍事的懸念に関してこう記している。「ソ連の国民の生活は貧弱である。昭和23、4年の日本に近い。GNP第2位の国でこの状態であるのは、共産圏諸国への援助もあるだろうが、その大部分が軍備の拡充に向けられているとしか考えられない。ソ連の国営航空会社アエロフロートが8,000機の旅客機を持っているが、必要な輸送能力とかけ離れた数は、洗剤戦力として考えなければならない。年間の軍備の伸びは過去5年の伸びより飛びぬけて大きい。」そして、「ソ連の軍備拡張、その南進政策実行の危険性は増大し、これに対する北欧の国民の神経はピリピリしている」。(以下続く)

2022.7.15 ソ連が GDP 世界第 2 位だった頃③



「世界第 2 位の GNP を疑いたくなる」と、1977 年にソ連を訪れた父が記している。メモには書いてないけれど、「空港で男が、時計を交換しようと寄ってきた」と話していた。「早朝から、終日かけて、道路や公園をゆっくりと掃除する人をいたるところで見かける」、「市内各所に設置された、お上りさん用の案内ボックスには、1 人が常駐しているが、利用者を見かけたことがない」、「ホテルの各会のエレベーター付近に」、「終日係員が机の前に座っている」、「百貨店などの 1 坪ほどの小さな売り場に、売り子が 1 人ずつ配されているが、買う人をほとんど見かけない」。さらに、エネルギーは極端に節約していて、「ホテル、事務所は昼間は電灯をつけないため、廊下は手探りを要する」、「ホテルの室内でも、夜間は資料を読むことはあきらめざるを得ない」、「食堂でも、何を食べているか分からないほど、なかなか点灯しない」、「ホテルの風呂も 37 度ほどの湯温」など。

今日、ロシアのエネルギー資源は世界有数であり、自給自足が可能である。世界から仮に孤立したとしても、日本とは違う。戦争は長引くどころか、世界の緊迫度は更に拡大しかねない。

ロシアの暴挙を見るにつけ、3 回にわたって綴りましたが、戦争に限らず、世界の遠く離れたところで起きた出来事が、リアルタイムに私たちの生活に直接影響を及ぼす時代。20～30 年ほど前に登場したグローバリズム(地球共同体)の考え方ではありませんが、環境問題や人権問題をはじめとする世界的な視野が、地域のまちづくりにとっても必要な時代になっています。

【写真】モスクワの地下鉄のコムソモリスカヤ駅。秒速 1m の高速のため、けが人が多く、監視人が 1 台ごとについていたと言う。今はどうなのだろう？

2022.7.15 ソ連がGDP世界第2位だった頃②



1977年、私の父はソ連や欧米を訪れている。その時のメモには、「日本の国民の無関心さとは対照的に、北欧諸国の国民の神経は、ソ連の軍備拡張の動きにピリピリしている」と書いてある。「ストックホルムには原爆退避壕があり、そこへの入り口が市内各所にある。鉄道や道路の鉄橋は、ソ連軍の進軍に備えて爆破できる装置が整備されている。高速道路には中央分離帯がなく、戦闘機の離着陸ができるようになっており、準備におさおさ怠りない」。「北欧だけのことかと思えば、そうではなく西ドイツのハンブルクでこの話をする、西ドイツでも同じことだと言下に答える」、「食糧は最低3ヵ月分は蓄えている」それで、大多数の人が、「今度戦争が起きて敵の占領下に置かれるぐらいなら、全国民戦死したほうが良いと思っている」。さて、我が国を見てみると、日本の近海で今何が起きているのか、統一教会が霊感商法以来も何を引き起こしてきたのか・・・あたかも報道規制がなされているかのように、客観的事実が流れてこない。都合の良い部分だけ切り取る、取り返しがつかなくなってから隣の様子を見ながら堰を切ったように情報を流し始める・・・報道は常に正しいと思い込みがちな日本人の風潮に対して、情報リテラシー(教育)の必要性が問われて久しいのだけれど、近年はそれに輪をかけるように、SNSなどによる怪しげな情報が氾濫している。にもかかわらず、最後は自己責任の名のもとに、人々は危うい状況に置かれたまま。客観的な報道を促すには、国民の厳しい視線が欠かせない。

【写真】20カペイカのコイン(1ルーブルの1/5相当)。ソ連の国旗に使われた鎌と槌のデザイン(農民階級と労働者階級の団結を象徴)が施されている。また、5つの頂点を持つ赤い星は、五大大陸で共産主義が最終的勝利を得ることを表す、などとの解釈がなされる五芒星が配されている。現在発行されているロシア通貨にはいずれのデザインも見られない。

2022.7.25 大暑



一昨日の 23 日、季節は大暑を迎えました。これから 15 日間の暑さをまずは乗り切りましょう。パワーを付けようと、週末から昨日にかけて、スーパーには鰻を焼くにおいが充満して食欲をそそります(6月の全国平均価格で 100g1,326 円で、2019 年 4 月 1,347 円に迫る高騰ぶり・・・)。県内で、この 20 日に過去最多の新型コロナ感染者数 2,594 人を記録して以降、2,000 人前後の日が続いています。第 4 回目の予防接種も始まっています。気を緩めることなく、引き続き予防に努めたいもの。とは言え、祇園祭の山鉾巡行をはじめ各地で久しぶりのイベントが再開されるなど、経済との両立へ、手探りの状態が続きます。

今朝、ラジオ体操が始まりました。感染が始まって以来、久しぶりに目にする光景です。比較的涼しさの感じられる朝 6 時半、栗野台の公園にも、ラジオの明るい掛け声が響き、子どもや保護者が間隔を取りながら集まりました。こんな具合に、次第に日常が戻って来てほしいものです。



朝から暑い一日の始まり。
参加者は他所と比べると集まっていますが、一時と比べると減りました。



2022.7.31 土潤溽暑（つちうるおうてむしあつし）



▲すっきりとした青空に、真っ白な雲…人影が見えません(11時15分撮影)。



▲同じハゴロモ類の一種のベッコウハゴロモ。翅があっても丁のように飛ぶことができなく、ジャンプするだけ。

◀淡い翡翠色で目立つアオバハゴロモ。きれいな色だけれど、群がっている様子は近づきがたい雰囲気。

未明に降った雨も早朝には上がり、眉山にかかっていた散りました(トップ写真・5時24分撮影)。昼前には36度を超え、時候どおりの1日となりました。昨日水やりした庭は、意外や湿ったままなのは、湿度のせいでしょう。

蒸し暑いと言えば、安倍前首相の銃撃を契機として、旧統一教会の事実が明らかになりつつあります。靈感商法以降、報道機関は、旧統一教会に関連する問題には口をつぐみ続けてきました。今、堰を切ったように国民の被害状況が報道されています。しかしなお、放送局によって報道姿勢には温度差があります。とりわけNHKのだんまりは、どうしたことでしょう。いろいろな憶測が飛び交い、政治と公共放送の信頼性が一際揺らいでいます。消極的プロパガンダとの濡れ衣が着せられることのないためにも、国会での審議が待たれます。

一方、新型コロナの感染拡大が止まりません。全国的にも医療機関での受診に至らず、自宅療養者数が増え続け、感染者の正確な数字すら把握できそうにありません。発熱が依頼を行っているという医療機関の電話もつながらない状況が起こっています。反面、感染当初と比べ、神流は活発化しています。このままでは更なる感染拡大が懸念されます。

ところで、大リーグのエンゼルスも惨憺たる、蒸し暑いゲームが続き、湿度100%?

2022.8.4 橋の日



8月4日は、橋の日。橋を通して、ふるさとを愛する心と河川の浄化を図る趣旨とか。

古い荷物を包んであった昭和8年9月6日の名古屋新聞に、忠節橋の架け替えの記事が掲載されています。全文を紹介します。

「岐阜県が明年度において架け替えを行わんと調査を急いでいる橋梁は、岐阜市の忠節橋と合渡橋でいずれも予算の編成の上本年の通常県会に提案する運びとなるもので」、忠節橋については、「3か年継続にて換算約60万円にて幅6間、長さ180間の鉄筋橋似て名岐電鉄が現在の北方線の岐阜市乗り入れを希望し電車を走らせる計画があれば会社は15万円ほど負担すれば県は許す方針である」と記されています。

現在の長良橋、合渡橋に次ぐ3番目の初代・忠節橋は木橋で、明治17年に有料で供用開始されたそうです【幅は2間1尺（約3.93m）、長さ96間3尺（約175.5m）】。昭和14年に着工するも、戦時下で昭和17年に一時中断、昭和20年7月9日の岐阜空襲により大部分が焼失して再度中断。戦後、設計を変更し、昭和

22年に工事を再開し、昭和24年8月1日に供用開始に至ります。戦後、日本で初めて架設された大規模な鋼材の橋です。その特徴ある形式は珍しく、我が国に現存するのは4例だけとか。市内電車がゴトンゴトンと行き来していた光景が今も目に浮かびます。忠節橋は、令和元年に土木学会選奨土木遺産の認定を受けました。

さて、地域を見渡すと、鳥羽川に架かる桜橋は、近年では珍しく車1台が通れる幅しかありません。通過交通で危険な状況にある栗野台南面の生活道路に通じる橋です。すでに40年以上前から、ラッシュ時には交通量が顕著でした。ただ、今と違うのは、桜橋を通るしかありませんでしたから、実質一方通行の状態でした。鳥羽川の堤防道路が整備された現在は、対面通行による通過交通量が一段と増えています。安全部会などでまちづくりビジョンを共有するとともに、これまでも何度か提起した地域改善要望や市長との懇話会などを通じて行政に声を上げ続ける必要があります。住民の生命と住環境を脅かしている現状を放置し続けて、地域と行政の不作為の協働はあってはなりません。



◀鳥羽川に架かる桜橋。幅が狭いので車両がすれ違えません。通行人は、橋桁の土台に上って車をやり過します。最近では珍しいですね。

2022.8.7 立秋



生い茂るエノコログサの中から、虫の声♪

暦の上では今日は立秋。ここ数日は雨模様のおかげで、暑さも少し落ち着いています。日中は暑くなりそうなので、早朝散歩に出かけました。道端でノブドウが青い実を付け、キマダラカメムシがとまっていました。撮影していると葉音を立てながらやってきたのがキイロスズメバチかな、ちょっと怖い。

小学校の近くのエノコログサの生い茂る草むらから秋の虫の声、多分コオロギだと思のですが、クサヒバリかマツムシのようにも聞こえます。多くの虫が絶え間なく鳴き続けているので、ヒバリのように軽やかに響きます。小学校から鳥羽川、栗野西方面を歩いてみたのですが、この一画だけで鳴いています。場所によってこんなに差が出るのですね。まだまだ虫の音の本番はこれから。散歩を終えた頃には汗びっしょり。





手相を見たり、姓名判断をし、「先祖の霊がとりついてる。」などと不安がらせ、「幸せを招く」、「健康になる。」と称して、印鑑や健康食品などを売りつける。

靈感商法

統一教会による靈感商法が社会問題となったのは、昭和 53 年頃からと言われます。岐阜市の消費者相談にも被害が寄せられるようになります。悪質商法被害の防止の観点から啓発が行われます(写真は、昭和 63 年に岐阜市が自治会を通じて配布したポスター形式の消費者啓発用リーフレットです。悪質な訪問販売の手口をいくつか紹介し、これを玄関口に貼って備えようというものです)。その後、靈感商法や統一教会に関する啓発や報道は鳴りを潜めます。しかし、この間にも被害は拡大していたと言われます。

先日、TBS 系列の番組「報道特集」(8月6日放送)で、統一教会の反社会的活動を見過ごしてきた責任は、政治、そしてマスコミにある、と司会者自ら、きっぱりと言いました。それに反し、今なお、統一教会による反社会的活動に関する報道を徹底して控える公共放送や通信社、地方紙?!

靈感商法や信教の自由を盾にした脅迫まがいの活動や人権侵害などに対し、国の施策、身近な地方自治体、そして客観的に事実を伝え続ける報道の今後の対応と姿勢が注目されます。



▶ポスターとして玄関に貼ることで、悪質な訪問販売をけん制する目的で昭和 63 年に作成・配布されたリーフレット。



◀リーフレットの表紙。SNS が隆盛の時代であっても、高齢者向けの情報周知には必要なツールでは?

2022.8.11 医療崩壊?



雨が降ったかと思うと、また太陽が照り付けるという蒸し暑い日が続きます。早朝の涼しい時間帯は、アブラゼミのにぎやかな声が聞こえてきます。

9日、県内の新型コロナの感染者数が4,725人と過去最多に。お盆を間近に、更なる感染拡大が懸念されます。東京都下に暮らす身内が、ついに先々週、感染。発熱外来の指定がされている病院すべてに電話が通じず、保健所もしかり。検査キットを送付してもらうサービスを知りネットで取り寄せ、陽性と判明。オンライン診療の情報をこれもネットで知り、受診、処方箋をもらい解熱薬を入手。後は自宅療養のみ。10日間の療養期間を過ぎて無事職場復帰できました。まだ40代前半だから、ネットの扱いもできるからいいようなものの、高齢者、一人世帯の場合、どう対処すれば良いのでしょうか。県内でも、12日からオンラインで検査、診断、サポートセンターの連絡先がSMSで送られてくる仕組みが始まるとのこと。しかし、これはもう、医療崩壊と言うべき危機的状況にあるのでは？

地方自治体でも政策面の争点とされるコロナ対策。多くが危機的な状況にありますが、お手本とされる県もいくつかあります。

個人が予防に努めても感染の拡大が続く中、安心できる医療の確保・提供のための環境整備のため、国、地方ともに手探りの厳しい状況が続きます。

2022.8.12 ビンボウカズラとヘクソカズラ



▲ヘクソカズラと言う名が気の毒なほど清楚。



▲ビンボウカズラ(ヤブガラシ)は蜜が豊富なため、ハチや蝶が集まってきます。



▲ビンボウカズラ(ヤブガラシ)の小さな花は、どこかつつましげ。

散策路に、ビンボウカズラとヘクソカズラが、蔓(つる)先に花を付けています(カズラは蔓植物のこと)。それにしても、なんという名前!!

ビンボウカズラの和名は、もともとヤブガラシ。庭を手入れする暇がない貧乏な人の住まいに生い茂るのが、その名の由来らしい。気の毒なヤブガラシですが、蜜が豊富なため、ハチや蝶などの昆虫がよく集まります。ちなみにヤブガラシの蔓は、自分の蔓には巻き付かないようで、含有するシュウ酸を認識しているためとか。また、絡みつくものがない場合は枯れてしまうそうです。

一方、ヘクソカズラはれっきとした和名。葉や実をつぶすと、悪臭がすることから名付けられました。害虫などから身を守るためのものらしい。別名サオトメバナと言う可愛らしい名前をもらっています。田植えをする娘(早乙女)のかぶる笠に似ていることにちなみ名付けられたもので、確かに和名にそぐわない愛らしい花を付けています。

そこで気になるのが花言葉。ヘクソカズラは「人嫌い」、ビンボウカズラは「不倫」・・・だそうです。

それはさておき、あだ名で呼び合うのを禁止する学校もあるらしい。一律に禁止するのもどうかと思いますが、ヘクソカズラ、ビンボウカズラはともに愛称とは言えないだろうなあ。

2022.8.18 灯籠まつり



▲浴衣姿の女性の姿も多く見られました。



▲人々の願いが込められた約 700 本のろうソクの灯りが闇に浮かび上がりました。



▲かつて見たことのないような人の波で境内は溢れました。

10年に一度(終わってみれば観測史上2番目でした)という今年の暑さ予想を受けて、7月、特に東北から中部エリアの電力需要のひっ迫への対策の必要性が叫ばれました。中部電力では、「でんき予報」を毎日ネットに掲載しています。ちなみに今日の需要ピーク時は14~15時の84%の予報。地域のスーパーやドラッグストアも、冷凍や冷蔵ケースの陳列用の照明が落ちてしまっています(そもそも点灯しなくても買い物には困りませんが)。昨夜降り続いた激しい雨のおかげで、今朝は蒸し暑い中にも夕方近くには涼風が吹いています。

今夜は、3年ぶりに大龍寺の灯籠まつりが開催されます。500年以上前から続く行事で、もともとは地域の人々がお盆の送り火に灯籠を作り奉納したのが始まりと言われます。50年ほど前から奉納したローソクに火がともされるようになったとのこと。願いが込められた幽玄な灯りが暗闇に浮かびます。何となく省エネ、スローライフ感がありますね。

それにしても、露店の並ぶ境内は、これまで記憶のない人の波で溢れ、前に進むのも一苦勞です。一方、コロナウィルスの感染拡大はピークが見通せない状況。

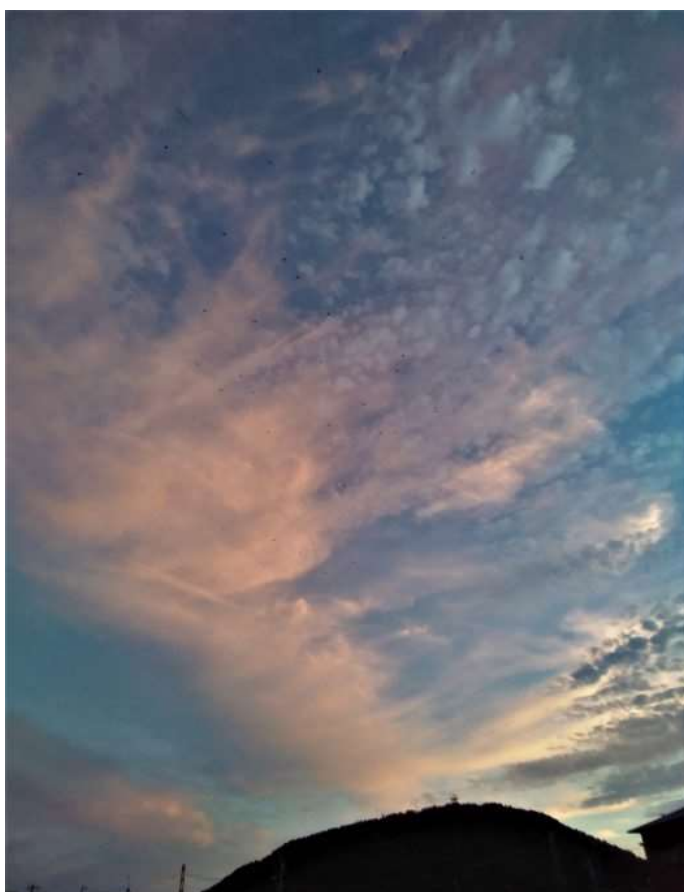
向かう途中、早くもススキが涼しげな夕風に穂を揺らす姿が拝めました。



▲薄暮の中、早くもススキの穂が、涼風に揺れていました。

◀灯りと言えば、電力ひっ迫に備え、地域の店舗は冷蔵、冷凍のケースの照明を落としています。

2022.8.27 夕立の怪



昨日は、雷を伴う激しい夕立が、市内を襲いました。1時間当たりの雨量は観測史上最大の78ミリを記録。家中のテレビやパソコンのコンセント、ケーブルを抜いて回りました。スマホまでもがインターネットやペイペイなどにつながらなくなり、電話もかけられぬようになり、一夜明けても復旧しません。10時過ぎに、携帯電話のショップに電話してみましたが、回線トラブルの情報が入っていないとのこと。パソコンで検索しても、通信事業者やCCNのホームページにトラブルは生じていません。理由は不明のまま、時折復旧してはまた駄目になるの繰り返した後、午後3時ごろ、家族のも含めてネットにつながるようになったものの、まだ不安定さが残っています。スマホは充電さえしていれば、災害時も役立つと勝手に思い込んでいたのですが、災害情報の入手や買い物などすこぶる不安です。加えて、通信障害の有無を把握しようにもできないのに至っては、怪しげな気配すら感じます。怪しげと言えば、夕暮れ時に

思い浮かんだのが子どもの頃に祖母から聞いた話。「朝のクモは殺すな、夜のクモは殺しても良い」。その理由は、外に巣を張る日は晴れの日だから(逆だと家の中が巣だらけになるから)とか、朝から殺生するなんぞは気分が良くないから、など。そもそもクモは害虫を退治し、仏様の使いとも殺さないに越したことはないのです。次いでながら、「夜に口笛を吹いてはいけない」(泥棒が合図に使うから、近所迷惑だからなど諸説あり)、「夜に爪を切つてはいけない」(暗い中でハサミを使うとケガするから)などは、教訓めいていて根拠があるようです。

トップの写真は、小さくて見づらいのですが、暮れなずむ眉山に向かって、カラスの群れが天高く飛んでいく様子です。これだけ群れる様は、あまり見たことのない風景です。



◀少し涼しくなり始めた頃、中空に女郎蜘蛛(コガネグモ)が巣を張っています。

2022.8.28 秋の気配



▲色づき始めたノブドウ。まだ色がそろっていません。



▲顔を出し始めた稲穂。

先日の夕立ちを境に、あの灼けつくような陽差しも柔らかさを感じるようになりました。朝夕は、夏のままの衣装では少し肌寒さを感じるほど。道路の擁壁の上で、ハギが枝垂れた枝に花を付けています。青栗が随分と膨らんでいます。植栽されたと思われる品種と山中の野生種では、大きさが数倍違います。ノブドウも場所によっては色づき始めました。

季節は、「天地始肅（てんちはじめてさむし）」の候へ。厳しい暑さにバテていたのに、去りゆく夏が何やら寂しく感じられる・・・歳とは関係ないようで。



▲草むらのアサガオが、とてもさわやか。



▲粟野台の団地の山際に自生する山栗が、高い枝に青い実を付けていました。



▲栽培されている栗は、山栗の数倍大きく膨らんでいます。手前のクサギの花は、そろそろ終わりがけ。

2022.8.31 ゴルバチョフ氏逝く



▲9月1日にオープンしたばかりの長良川国際会議場で催されたフォーラムの参加者紹介。ゴルバチョフ氏は基調講演とパネルディスカッションに参加している。フォーラムには、全国から約4,000人の申し込みがあり、抽選で1,200人が選ばれた。



▲プロフィールには、統一教会が運営資金を出している財団の理事長であることが紹介されている。

ミハイル・セルゲエヴィチ・ゴルバチョフ氏が30日、病気のためモスクワで亡くなったと、今朝のニュースが報じています。米国と共に冷戦の終結を宣言するなど、国際社会の緊張緩和に貢献し、1990年にノーベル平和賞を受賞しました。ただ、ソ連解体につながったなど、ロシア国内での評価は著しく低いようです。

政界引退後は頻繁に来日し、地方都市にも足を伸ばし、岐阜市にも1995年11月12日開催のフォーラムに登壇したほか、長良中学校を翌日訪問し(現都ホテルの岐阜ルネッサンスホテルに宿泊)、授業参観し、体育館で生徒と意見交換の場を持っています(報道機関の主権による場合、報道他社が報じないのが通例のため、知る人が少ないのではないのでしょうか)。

意外な事実が分かりました。1991年12月に国際社会経済・政治研究基金(通称、ゴルバチョフ基金又はゴルバチョフ財団)を設立、自ら会長に就任したのですが、その運営資金は長い間、統一教会に依存していたのです(チラシのプロフィールにも財団名が明記されています)。その統一教会は1980年代からソ連でも活動を始め、ペレストロイカに乗じて、堂々と布教活動をするようになったようです(現在は法的制約下で活動は事実上不可能)。

宗教や結社の自由などが提起した安全・安心を損なう社会の脆弱性を補完し、持続可能な社会を実現するための法制度・体制を、民主主義にほころびが生じる前に、被害の再発を防ぐために、対策を講じることは、我が国が直面する課題と言えます。

これ以降の日記は、現在編集中です。